

# 非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

## 金

### 【海外】

#### 1. 価格推移

5月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,228.15 (18日)	1,175.95 (1日)
国内建値(円/g)	: 4,755 (29日)	4,584 (8日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 120.26 (14日)	124.73 (29日)

5月の海外金相場は1日に\$1,179.00/toz(トロイオンス)と小安くスタート、上旬にかけては急落の反動から買い戻され、\$1,190近辺での小動きとなった。中旬には、ドルがユーロに対して下落したことや4月の米雇用統計をきっかけとした米連邦準備理事会(FRB)による利上げ時期の不透明感の台頭等から金を買われた。13日に\$1,200台を回復すると、週明けの18日には、前週末に米景気の回復の遅れを示す指標の発表がなされたこともあり、\$1,228.15と2月中旬以来3か月ぶりの高値をつけた。ところが、19日に発表された良好な米住宅指標をきっかけにドル高が進行、金はそれを受けて再び\$1,200台近辺まで下落した。下旬も、この基調は崩れず、米利上げ観測がさらに強まったことから、26日は\$1,185.40まで下落、月初の安値水準に迫る動きを見せた。しかし、月末には、その水準を安値とみた中印からの現物買いが出て、僅かながら反発、29日には\$1,191.40をつけて翌月入りした。

#### 2. 為替相場推移

5月の為替相場は1日に\$1=120.65円(TTS相場、以下同じ)でスタート、上旬にかけては様子見状態となり、\$1=120円水準での小動きに終始した。8日に発表された4月の米雇用統計が概ね市場の範囲内だったこともあり、円は対ドルで僅かに弱含んだものの、中旬入り後は、雇用統計の平均時給が市場予想に届かなかったことや、3月の非農業部門の雇用者数が大幅な下方修正となったことから、米早期利上げ観測が後退し、ドル売りに傾いて行った。しかしながら、基調はドル安だったものの、その相場は\$1=120円前後の小幅な値動きに終始、上旬の値動きとほとんど変わらない状態だった。ところが、19日に米住宅指標が発表されると、その良好な結果から、円売り・ドル買いが優勢となり、下旬入り後は、\$1=120円水準から\$1=122円水準へ円が続落していった。月末には、好調な米経済指標を背景に、米連邦準備理事会

(FRB)が年内に利上げに踏み切るとの見方が強まり、ドルを買う動きが活発化して、円は\$1=124 円水準へ急落した。29 日には\$1=124.73 円と 2007 年(平成 19 年)6 月以来ほぼ 8 年ぶりの安値をつけて越月した。さらに 6 月 1 日は\$1=125.24 円をつけ、2002 年(平成 14 年)12 月以来 12 年半ぶりの安値を記録した。

対ユーロでの円は、5 月、概ね€=136 円前後の小動きに終始した。中旬から下旬にかけて、欧州中央銀行が債権買い入れを早めるとの見方から、ユーロは対ドルで下げに転じたが、円に対してはほとんど変化がなかった。

## 【国内】

### 1. 建値推移

5 月の国内金山元建値は連休明けの 7 日に 4,590 円/g(グラム)と前月レベルより下げてスタート、中旬にかけては海外相場の反発から、4,700 円台まで上昇し、高値圏で堅調な値動きを示した。その後、下旬にかけては、海外相場が下落したものの、その下向きのペースに合わせるように円安が進行したことで、建値は下げることなく、4,700 円台を維持した。29 日には 2 月以来の高値である 4,755 円をつけて越月した。

### 2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2015 年 4 月分=平成 27 年 4 月分)

生産 : 8,908 kg (前月比 17.3%増、前年比 4.7%増)

出荷 : 9,608 kg (前月比 12.9%減、前年比 25.0%増)

在庫 : 4,168 kg (前月比 14.4%増、前年比 14.0%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

4 月の生産は前月の反動で前月比減となったが、前年同月比では増加した。前年同月比は 8 か月連続の増と上昇基調が続く。出荷も前月の反動から前月に比べ減少したが、前年同月比では 8 か月連続の増。在庫は生産減から減少、前年同月比も 8 か月ぶりの減。

## 【海外】

2015年5月のLME銅相場は中旬にかけてドル安を背景に前月比一段高の\$6,300~6,400/t圏を推移したが、その後はドルの急伸につれて\$6,000圏へと反落した。5月12日に今年の最高値\$6,448/tを付けた後下落し、27日には\$6,085/tと5月の最安値を付け、月末29日は\$6,088.5/tだった。

ドルは前月末、米連邦準備制度理事会(FRB)が少なくとも9月までは利上げしない可能性を示唆したことを契機に下落し、中旬にかけて対ユーロで2月以来のドル安水準となる\$1.12~1.15圏を推移した。

上旬は米国経済指標も銅相場押し上げ要因となった。3月の製造業受注が昨年7月以来の大幅な伸び、中古住宅販売は2013年9月以来の高水準となった。

中旬は中国の利下げ、ユーロ圏の景気指標が銅相場を下支えた。中国人民銀行は10日、基準金利を0.25%引き下げ、11日から適用すると発表した。利下げは昨年11月以降で3回目。ユーロ圏の第1四半期GDPは前年同期比1.0%増と2013年第2四半期以来の高い伸びとなった。一方、中国経済は4月の工業生産が2か月連続で5%台の低い伸び、小売売上高は2006年2月以来、1~4月の固定資産投資は2000年12月以来の低い伸びにとどまり、新築住宅価格は8か月連続で下落するなど依然低迷しているため、追加刺激策の発動観測が浮上した。

下旬はドルが上昇に転じた。米国の4月の住宅着工件数が2007年11月以来、中古住宅販売仮契約指数は2006年5月以来の高水準となり、新築住宅販売も2か月ぶりに増加した。さらに、FRBのイエレン議長が年内の利上げを示唆したこと、ギリシャの国際通貨基金(IMF)への債務返済期限が6月5日に迫りデフォルト懸念が高まったことなどを材料に、ドルは月末にかけて対ユーロで\$1.10割れへと反発に転じた。

こうしたなか、銅相場は反落し、月末には米国の第1四半期GDP改定値が前期比0.7%減へと下方修正されたことから\$6,100を割り込んだ。

供給障害事例としては、アディチャビルラのニフティ銅鉱山(豪)は5月12日、坑内作業員の死亡事故が発生し、操業を一時停止した。同鉱山の粗鉱生産能力は2.3百万t/年で、精鉱はダヘジ銅製錬所(インド)に出荷されている。

金川集団は金川銅製錬所(中国)を5月12日から6月12日までの予定で定修閉鎖した。減産量は35~40千tと推測される。

ペルー鉱山冶金鉄鋼労連は5月18日、労働者の集団解雇や権利縮小を可能にする雇用関連法案に反対する無期限ストライキを開始した。しかし、ペルー労働省が違法スト宣言を発令し、交渉に応じることを約束したため、ストは25日に解除された。アンタミナ、セロベルデ、ヤナコチャ、ブエナヴェンチュラなど大手鉱山会社の生産に

影響は出なかった。

コデルコは5月27日、ヴェンタナス銅製錬所(チリ)の閉鎖を検討中との地元紙の報道を否定した。同製錬所は二酸化硫黄の排出量を削減するために160百万ドルの投資が計画されている。

一方、烟台鵬暉銅業は資金調達難のため昨年12月に閉鎖した烟台銅製錬所(中国)の生産を5月末か6月初めに再開する。これに先立って、山東省政府は新会社、烟台国潤を設立し、同製錬所を買収したうえで、烟台鵬暉に貸与する。同製錬所の生産能力は120千t/年。

需給状況については、国際銅研究会によれば、2015年1~2月の世界の銅鉱石生産は前年同期比2.2%増3,953千t、地金生産は5.0%増の3,652千t、消費は3.5%減の3,499千t、この結果、地金需給バランスは前年同期の▲148千tから+153千tへと供給過剰に転じた(注)。報告在庫は前年比5.2%増の1,509千t、在庫/消費比率は3.2週間から3.5週間に上昇した。

鉱石生産の内訳は精鉱が2%、SXEWは4%増加した。インドネシア、チリの生産回復が主因で、チリは新規鉱山が前年稼働した。ペルーは6%、米国は3%増加した。地域別にはアフリカが2%、アメリカが1.5%、アジアが9.5%増加したが、ヨーロッパは0.5%、オセアニアは10%減少した。鉱山稼働率は86.4%から84.3%に低下した。

地金生産の内訳は一次生産が3%、二次生産は13%増加した。国別には中国が9%増加したほか、フィリピン、インドネシア、コンゴ民主共和国が合計で48%増加した。チリは2%、米国は7%減少した。地域別にはアフリカが9%、アジアが10%、オセアニアが2%増加、アメリカは2%減少、ヨーロッパは横ばいであった。精製工場の稼働率は79.9%から81.3%に上昇した。

消費は中国の見掛け消費が5%減少した。ネット輸入が26%減少したことによるもの。中国を除く世界の消費は2%減少した。昨年9月に輸出税を撤廃したロシアが42%減少したことが主因。地域別にはアジアが2%減少(中国を除くアジアは5%増加)、EUは12%、オセアニアは80%減少した。アフリカは8%、アメリカは4%増加した。

(注)中国の保税在庫の変動分を調整した世界の地金需給バランスは+153千tと推定される。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

4/24 760      5/7 810      5/13 820      5/19 810      5/27 800      6/1 790

### 2. 生産・出荷・在庫(2015年4月分=平成27年4月分)

2015年(平成27年)4月の銅地金生産は前月比2.3%増、前年同月比2.6%減の125.2千tと前月比は2か月連続増加したが、一部製錬所の定修の影響もあり、前年比は3か月連続の減少となった。出荷は各12.6%減、4.4%減の128.8千tで前月比は4か月ぶり、前年比は2か月ぶりの減少。内訳は内販が前月比5.5%増、前年比1.6%増の88.7千tで前年比は4か月ぶりの増加。輸出は前月比36.7%減、前年比15.4%減の40.4千tと3か月ぶりの前年比減。内販のうち電線向けは前年比6.4%減の52.9千tで4か月連続の減少、伸銅品向けは前年比7.0%増の29.2千tで2か月連続の増加。在庫は前月比1.1%増、前年比12.1%増の99.0千tで前月比が3か月ぶり、前年比は13か月連続の増加となった

### 3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成27年4月の銅電線出荷は前月比8.0%減、前年同月比3.1%減の57.5千t(推定)と6か月連続の前年比減。うち内需は前年比1.1%増の55.8千tと7か月ぶりに増加、輸出は58.7%減の1.7千tで4か月ぶりの減少。内需の部門別には、電力が5か月、通信が3か月連続、建設電販は6か月ぶりに増加、電気機械、その他は7か月、自動車は2か月連続の減少となった。

日本伸銅協会によれば、平成27年4月の伸銅品生産は前月比3.5%減、前年同月比4.9%減の67.3千t(速報)と前年比は2か月連続の減少となった。うち内需向けは前年比5.5%減の55.3千tで6か月連続の減少、輸出は1.9%減の12.0千tで9か月ぶりの減少。品種別には半導体、コネクタ向けの銅条が22か月、青銅板条は5か月連続の増加となったが、自動車端子向けの黄銅条は再び減少に転じ、エアコン向けの銅管は6か月連続の減少となった。

## 【海外】

2015年5月のLME鉛相場はドル相場に連動する展開となり、前半は\$2,000～2,100/t圏を推移していたが、後半は\$1,900/t台での推移となった。5月5日に今年の最高値\$2,140/tを付けた後下落し、20日には\$1,919/tと5月の最安値を付け、その後反転し月末29日は\$1,959.5/tだった。

ドルは前月末、米連邦準備制度理事会(FRB)が少なくとも9月までは利上げしない可能性を示唆したことを契機に下落し、中旬にかけて対ユーロで2月以来のドル安水準となる\$1.12～1.15圏を推移した。

経済環境については、米国は3月の製造業受注が昨年7月以来の大幅な伸び、4月の住宅着工件数が2007年11月以来、中古住宅販売仮契約指数は2006年5月以来の高水準となり、新築住宅販売も2か月ぶりに増加した。第1四半期GDP改定値は前期比0.7%減へと下方修正されたが、市場予想の0.8%減を上回った。こうしたなか、FRBのイエレン議長は年内の利上げを示唆した。

中国では人民銀行が10日、基準金利を0.25%引き下げ、11日から適用すると発表した。利下げは昨年11月以降で3回目。しかし、实体经济は4月の工業生産が2か月連続で5%台、小売売上高は2006年2月以来、1～4月の固定資産投資は2000年12月以来の低い伸びとなり、新築住宅価格は8か月連続で下落、5月のHSBC製造業景気指数(PMI)は3か月連続で50を下回るなど引き続き低迷した。このため、追加刺激策の発動観測が浮上している。

ユーロ圏経済は第1四半期GDPが前年同期比1.0%増と2013年第2四半期以来の高い伸び率となった。一方で、ギリシャの国際通貨基金(IMF)への債務返済期限が6月5日に迫りデフォルト懸念が高まった。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2015年1～3月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比0.9%減の1,146千t、地金生産は2.3%減の2,546千t、消費は2.7%減の2,535千t、地金需給バランスは前年同期の▲1千tから+11千tの供給過剰に転じた。

鉱石生産はアメリカが3.2%、ヨーロッパが3.8%増加したが、アジアは0.3%、オセアニアは10.7%、アフリカは4.8%減少した。国別にはペルー、米国の増加がオーストラリアの減少に相殺された。地金生産はヨーロッパが2.8%増加、アフリカは横ばい、アジアは3.0%、アメリカは4.4%、オセアニアは4.9%減少した。中国の減産とラオロヤ製錬所(ペルー)の生産停止が主因。消費はアフリカが13.0%増加、オセアニアは横ばい、アジアは2.5%、ヨーロッパは2.5%減少した。主要消費国の中国、米国、ヨーロッパがいずれも減少した。地金の報告在庫は前年同期比2.1%増の581千t、在庫/消費比率は2.7週間から2.9週間に上昇した。

中国は鉱石生産が前年同期比 1.0%減の 510 千t、地金生産は 4.4%減の 988 千t、鉛精鉱輸入は 218 千tで横ばい、地金のネット輸出は 1 千tから 9 千tに増加した。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は 4.6%減の 994 千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

3/2	265	3/9	278	4/9	293	4/16	300	4/23	310	5/1	315
5/13	310	5/19	295	6/1	303						

5 月の鉛建値は月初 315 千円と今年最高値をつけたが、LME 鉛相場の反落から中旬には再び 300 千円/t を割り込んだ。6 月に入ると 300 千円台を回復した。

### 2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2015 年 4 月分=平成 27 年 4 月分)

生産	: 16,227t	(前月比 37.8%増、前年比 2.8%増)
出荷	: 15,914t	(前月比 1.1%増、前年比 3.3%減)
在庫	: 22,890t	(前月比 1.2%増、前年比 10.4%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

4 月の生産は契島製錬所の定修明けから前月比、前年同月比とも増。前年同月比は 6 か月ぶりの増。出荷は連休前の前倒しによる内販増で、前月比微増となるも、前年同月比ではマイナスと前年レベルには届かず。在庫は前月比微増、前年同月比も 32 か月連続の増と依然高水準。

### 3. 需要部門動向

4 月の自動車生産台数は前年同月比 7.5%減の 713,155 台となり、10 か月連続で前年同月を下回った。消費増税後の国内販売の低調が依然として続いている。

乗用車は前年同月比 10 か月連続のマイナス、トラックは同 3 か月連続のプラス、バスも同 2 か月連続のプラスとなった。

4 月の自動車輸出台数は前年同月比 1.1%増の 379,907 台となり、2 か月連続で前年同月を上回った。円安の影響により、輸出が増加に転じている。

一方、4 月の二輪車生産台数は前年同月比 12.0%減の 35,912 台と 6 か月連続で前年同月を下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、3 月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で 2,195 千個(前年同月比 3%減)と 6 か月連続で低下したが、自動車用以外の鉛蓄電池は 763 千個(同 2%増)と 3 か月ぶりに上昇した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで 2,958 千個(同 2%減)と 6 か月連続で減少した。

鉛関連製品生産統計

		3月	4月(速報値)
自動車	数量(台)	878,488	713,155
	前年同月比(%)	93.5	92.5
		2月	3月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量 t)	15,082	16,615
	前年同月比(%)	98.3	98.2

2014年度生産計:自動車用鉛蓄電池 264,918 鉛量 t(前年度比 0.2%減、再び前年度実績割れへ)

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)



【海外】

2015年5月のLME亜鉛相場はドル相場に連動する展開となり、前半は\$2,200~2,400/t圏を推移したが、後半は\$2,100~2,200/t圏に軟化した。5月6日に今年の最高値\$2,405/tを付けた後下落し、27日には\$2,166/tと5月の最安値を付け、その後反転し月末29日は\$2,212.5/tだった。

ドルは前月末、米連邦準備制度理事会(FRB)が少なくとも9月までは利上げしない可能性を示唆したことを契機に下落し、中旬にかけて対ユーロで2月以来のドル安水準となる\$1.12~1.15圏を推移した。

経済環境については、米国は3月の製造業受注が昨年7月以来の大幅な伸び、4月の住宅着工件数が2007年11月以来、中古住宅販売仮契約指数は2006年5月以来の高水準となり、新築住宅販売も2か月ぶりに増加した。第1四半期GDP改定値は前期比0.7%減へと下方修正されたが、市場予想の0.8%減を上回った。こうしたなか、FRBのイエレン議長は年内の利上げを示唆した。

中国では人民銀行が10日、基準金利を0.25%引き下げ、11日から適用すると発表した。利下げは昨年11月以降で3回目。しかし、实体经济は4月の工業生産が2か月連続で5%台、小売売上高は2006年2月以来、1~4月の固定資産投資は2000年12月以来の低い伸びとなり、新築住宅価格は8か月連続で下落、5月のHSBC製造業景気指数(PMI)は3か月連続で50を下回るなど引き続き低迷した。このため、追加刺激策の発動観測が浮上している。

ユーロ圏経済は第1四半期GDPが前年同期比1.0%増と2013年第2四半期以来の高い伸び率となった。一方で、ギリシャの国際通貨基金(IMF)への債務返済期限が6月5日に迫りデフォルト懸念が高まった。

供給障害事例として、ハドベイミネラルズのフリント及びスノーレイク事業所(加)労組は、経営側との労働協約更改交渉が決裂したことから、5月2日、ストライキに突入した。このうち生産・補修部門と事務・技術部門の労組は5月29日、経営側と合意し、他の1労組もストを中断した。しかし、もう1労組は経営側の提案を拒否し、ストを続行。フリント事業所には777亜鉛銅鉱山、スノーレイク事業所にはラロア亜鉛銅金鉱山が所在する。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2015年1~3月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比4.3%増の3,138千t、地金生産は8.3%増の3,414千t、消費は2.3%増の3,274千t、地金需給バランスは前年同期の▲47千tから+140千tの供給過剰に転じた。

鉱石生産はアジアが1.3%、アメリカが6.5%、オセアニアは9.1%、ヨーロッパは8.4%増加、アフリカは2.5%減少した。国別にはオーストラリア、インド、ペルー、スウ

エーデンが増加した。地金生産はアジアが 14.1%増加、アメリカ、ヨーロッパは横ばい、オセアニアは 3.3%、アフリカは 44.7%減少した。国別にはカナダ、中国、インド、韓国が増加した。消費はアジアが 4.4%、アフリカは 31.6%増加したが、ヨーロッパは横ばい、アメリカは 6.2%、オセアニアは 6.4%減少した。国別には米国が減少、中国、韓国、南アフリカ、タイは増加した。

地金の報告在庫は前年同期比 19.8%減の 1,487 千tで、在庫/消費比率は 6.2 週間から 5.8 週間に低下した。

中国は鉱石生産が前年同期比 4.3%減の 987 千t、地金生産は 19.2%増の 1,461 千t、亜鉛精鉱輸入は 32.1%増の 309 千t、地金のネット輸入は 88.2%減の 43 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 3.9%増の 1,446 千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

3/2	292	3/5	289	3/10	292	3/13	289	3/19	283	3/24	298
4/1	295	4/8	307	4/13	316	4/23	319	5/7	334	5/12	328
5/18	322	5/25	313	6/1	319						

5月の亜鉛建値は月初 334 千円と今年最高値をつけたが、LME 亜鉛相場の反落から下落し続けた。6月に入り LME 相場の反発と円安を受け 319 千円/tに戻した。

### 2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2015年4月分=平成27年4月分)

生産	: 50,508t	(前月比 6.8%減、前年比 11.8%増)
出荷	: 45,948t	(前月比 26.5%減、前年比 6.4%減)
在庫	: 78,721t	(前月比 6.2%増、前年比 23.8%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

4月の生産は八戸製錬所の不調等から前月比減となるも、前年同月比は 2 か月連続の増。出荷は内販が連休前の前倒しで微増したものの、輸出が 8,863t と前月比 66.6%の大幅減でトータルでは前月比、前年同月比とも減。前年同月比は 4 か月ぶりのマイナス。在庫は出荷減から前月比増、前年同月比も 8 か月連続の増。

### 3. 需要部門動向

4月の鉱工業生産指数は前月比 1.0%増、前年同月比 0.1%減の 99.1(季節調整済、2010年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は 3 か月ぶりのプラス、前年同月比は 7 か月連続のマイナス。経産省は生産の基調判断を「緩やかな持ち直しの動きがみられる」で据え置いた。

生産指数は 15 業種のうち 9 業種が前月比増となった。電子部品・デバイス鉱業が

前月比 5.2%増、電気機械工業が同 6.4%増となったが、輸送機械工業は同 0.7%減、情報通信機械工業も同 6.6%の減となった。

出荷指数は前月比 0.4%増の 97.7 となり 3 か月ぶりに上昇したが、前年同月比は ±0.0%と横ばいだった。一方、在庫指数は前月比 ±0.0%の 113.4。在庫率指数は同 1.4%減の 112.8。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、5 月が前月比 0.5%の上昇、6 月は同 0.5%の低下と見込んでいる。

3 月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は前年同月比 9 か月連続の減、数量も 6 か月連続の 100 万 t 台割れ。2014 年度計は再び前年度実績割れ。

3 月の伸銅品生産量は 69,751t(確報値、対前年同月比 ▲0.3%) (対前月比 +5.9%)。11 月以降 5 か月にわたり対前年並みで推移している。3 月は 2 か月振りの微減となった。品種別では、条製品の堅調に対し、銅管は昨年比弱含み、黄銅棒は対前年比マイナスで調整が続くなど、品種間で差がある。

黄銅製品では、黄銅条が 9,258t(速報値、以下同じ)。対前年比は 5 か月振りにプラス(+1.3%)。対前月比(+16.3%)、(前年同月比、内需+2.1%、輸出 ▲7.3%)。黄銅棒は 15,262t、8 か月連続の対前年比マイナス(▲8.0%)。15 千 t 台での推移と住宅関連の調整影響が続く(前年同月比、内需 ▲5.9%、輸出 ▲32.6%)。

2014 年度の黄銅製品生産全体では再び前年度実績割れ。同年度の亜鉛ダイカスト生産は 4 年連続の前年度比減だが、亜鉛華は 2 年連続の前年度比増。

#### 亜鉛関連製品生産統計

		2 月	3 月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	840,937	992,668
	前年同月比(%)	91.1	91.3
黄銅製品	数量(t)	26,905	28,750
	前年同月比(%)	94.9	95.7
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,633	1,852
	前年同月比(%)	91.3	98.2
亜鉛華	数量(t)	4,801	5,485
	前年同月比(%)	100.4	98.3

2014 年度生産計: 亜鉛めっき鋼板 11,395,852t(前年度比 4.6%減)、黄銅製品 338,117t(同 0.1%減)、亜鉛ダイカスト 20,539t(同 6.6%減)、亜鉛華 60,682t(同 0.8%増)

(出所: 経済産業省生産動態統計調査)